

K-544

米沢市埋蔵文化財報告書 第48集

# 一ノ坂

一ノ坂遺跡発掘調査概報

第 5 集



大型住居跡復元図

平成 7 年 3 月

1995

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財報告書 第48集

# 一ノ坂

一ノ坂遺跡発掘調査概報

第 5 集

平成 7 年 3 月

1995

米沢市教育委員会

## 序 文

本報告書は一ノ坂遺跡第8次調査の成果をまとめたものです。一ノ坂遺跡は平成元年度の個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査として実施されました。この調査によって、大型住居跡と多量の遺物が発見されました。

大型住居跡の発見は国内最長の規模で、平成2年度からは文化庁の補助を受けながら、学術調査として今日まで確認調査を継続してきたものです。これまでの調査で大型住宅跡の他に国内初の連房型住居跡、墓壙などが検出され、集落全体の様子が少しづつ明らかにされようとしています。

とりわけ、遺物は石器を中心に百万点以上確認されています。分析の結果、石器を製作していた集落跡であることが判明しています。しかも一ノ坂遺跡で製作された石器は、関東方面にまで確認されています。

今回の第8次調査では、これまで未確認の南西部箇所を調査し、住居跡と集落の範囲を確認しました。

今後は、遺物を整理し報告するとともに保存、活用に対して関係機関と充分協議しながら進めてゆく所存であります。関係各位の一層のお力添いをお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査にあたり格別のご指導を賜りました文化庁、山形県教育府文化財課、また地権者の丸山亥吉氏、伊藤忠士氏の多大なるご協力に対し心から御礼を申し上げます。

平成7年3月

米沢市教育委員会

教育長 相田 實

## 本 文 目 次

(表紙題字は米沢市教育委員会教育長 相田 實による)

序 文	
例 言	
目 次	
1. 遺跡の位置と調査に至る経過	1
2. 調査の経過	7
3. 検出遺構	10
4. 出土遺物	15
5. ま と め	16
参考文献	18
一ノ坂遺跡調査一覧表	19
報告書抄録	20

## 挿 図 目 次

第1図 一ノ坂遺跡位置図、グリット配図	2
第2図 一ノ坂遺跡第8次調査Bトレンチ遺構平面図	4
第3図 一ノ坂遺跡第8次調査区全体図	5・6
第4図 一ノ坂遺跡第8次調査区土層想定図(1)	8
第5図 一ノ坂遺跡第8次調査区土層想定図(2)	9
第6図 一ノ坂遺跡第8次調査区土層柱状、土層想定図(3)	11
第7図 一ノ坂遺跡遺構全体図	13・14
第8図 一ノ坂遺跡復元想定図	17

## 図 版 目 次

第一図版 一ノ坂遺跡第8次調査の発掘、出土土器、発掘風景	
第二図版 一ノ坂遺跡第8次調査の発掘、Bトレンチ	

## 例　　言

1. 本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて、平成6年度（1994）に実施した一ノ坂遺跡「大型竪穴住居跡」周辺の開発予定地域、調査概報第5集である。
2. 発掘調査は、米沢市教育委員会が主体となって、大型竪穴住居跡確認に伴う周辺開発予定地域の第8次調査として平成6年4月18日～同年5月10日の期間で実施したものである。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査総括	船山豊弘（文化課長）
調査担当	手塚 孝（文化課埋蔵文化財係主任）
調査主任	菊地政信（文化課埋蔵文化財係主任）
作業員	遠藤忠一、小浦文吉、武田房次郎、菊地そのえ 平野洋子、松本三郎、丸山トシ子
事務局	我妻淳一（文化課長補佐） 月山隆弘（文化課埋蔵文化財係主事）
調査指導	文化庁、山形県教育庁文化財課
調査協力	丸山亥吉、伊藤忠士

4. 挿図・図版の縮尺は各図面、写真にスケールで示した。
5. 本書の作成は菊地政信が担当した。全体的に手塚孝が総括した。責任校正は我妻淳一がその責務にあたった。
6. 土器拓影図の各遺物についてある番号は、写真図版と同一番号である。
7. 遺跡等の土色については、「新版標準土色表」（小山、竹原1973）を参考にした。

## 1. 遺跡の位置と調査に至る経過

本遺跡は、米沢市街地西方約2kmに位置し、矢来一丁目に所在する。(第1図参照) 遺跡周辺の地形は、笹野山丘陵の西端、羽山山麓から東に張り出した暖かな舌状微高地で、標高259~261mを測を測る。現況は北東部が住宅、南西部は畠、果樹園等が広がる。

遺跡の調査は、平成元年度(1989)に本遺跡内での住宅造成計画に伴い、本市教育委員会が実施した発掘調査が最初であり、この調査により、国内最長の大型竪穴住居跡1棟、石器を中心とした遺物138万点以上を検出した。これらの事項から、文化庁並びに県教育庁文化財課の指導のもと、確認調査や遺構の保存、出土遺物の整理を進め、今回、平成6年度の調査は第8次調査にあたる。現地での確認調査は第8次調査で終了する予定であり、一連の確認調査の概要を下記に述べておく。調査箇所、遺構配置については第8図を参照願う。

### 1) 第1次調査

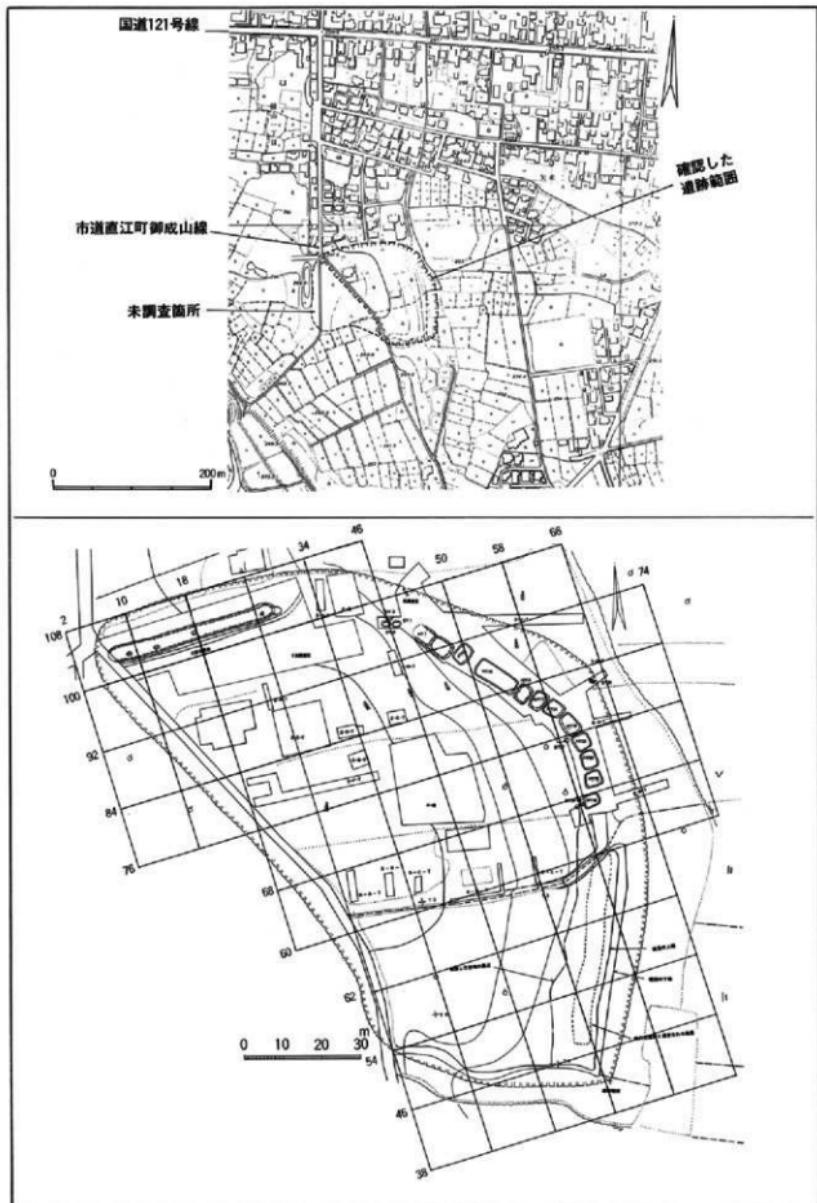
- a 調査期間 平成元年5月12日~同年6月30日
- b 調査面積 800m<sup>2</sup>
- c 検出遺構 大型竪穴住居跡(石器工房跡)1基、構状遺構、集石遺構。
- d 出土遺物 石鏃228点、石錐156点、石籠10点、石匙250点、両尖匕首、石鋸230点(未点成、断念、製作途上を含む)、総器516点、剥片138万点、土器片9,560点、計1,390,950点。
- e 参考文献 米沢市埋蔵文化財調査報告書第27集「遺跡詳細分布調査報告書第3集」18頁~25頁
- f 年代 繩文前期初頭(関山式併行)約6000年前。以下省略

### 2) 第2次調査

- a 調査期間 平成2年(1990)2月22日~同年3月3日
- b 調査面積 221m<sup>2</sup>
- c 検出遺構 風倒木跡5基、屋外炉2基。
- d 出土遺物 剥片20点、土器片15点、計35点
- e 参考文献 米沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第四集18頁~25頁

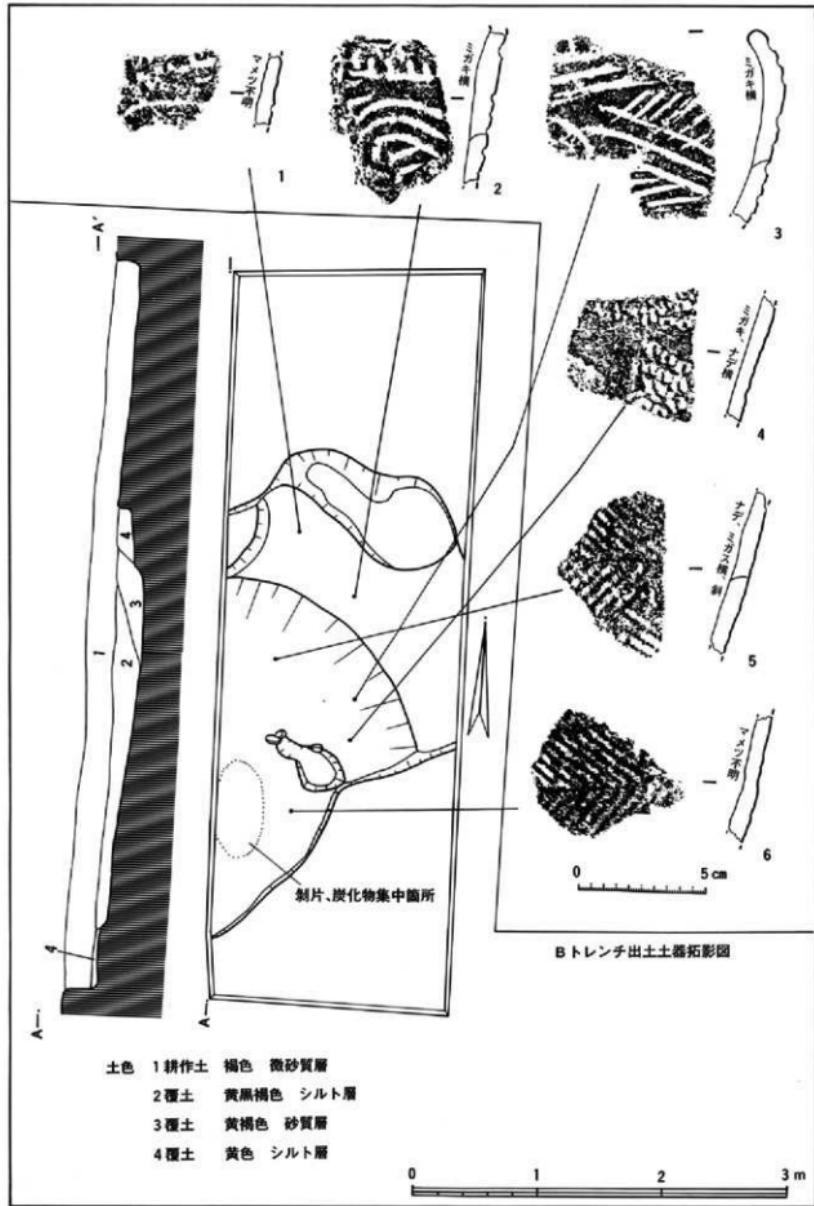
### 3) 第3次調査

- a 調査期間 平成2年4月9日~同年4月11日、同年5月31日~同年6月14日

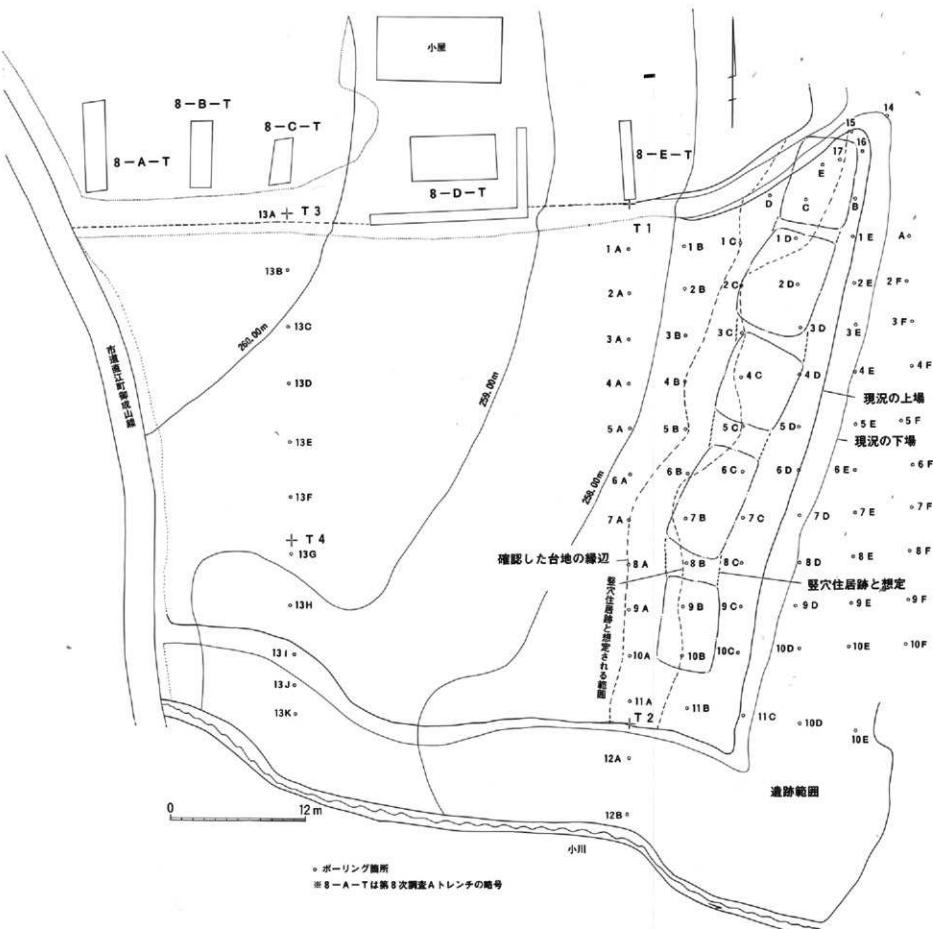


第1図 一ノ坂遺跡位置図、グリッド配図

- b 調査面積 106m<sup>2</sup>
  - c 検出遺構 墓壙3基、集石遺構1基
  - d 出土遺物 石鎌、石錐、石鋸等の完成石器56点、剝片13,942点、土器片383点、計14,336点。
  - e 参考文献 米沢市埋蔵文化財調査報告書第30集「一ノ坂遺跡発掘調査概報第1集」
- 4) 第4次調査
- a 調査期間 平成2年11月1日～同年12月21日
  - b 調査面積 200m<sup>2</sup>
  - c 検出遺構 堪穴住居跡9基 土壙2基
  - d 出土遺物 石鎌、石錐、石鋸、石匙等の完成土器62点、礫器36点、剝片642点、土器片690点、計1,430点。
  - e 参考文献 米沢市埋蔵文化財調査報告書第30集「一ノ坂遺跡発掘調査概報第1集」
- 5) 第5次調査
- a 調査期間 平成3年(1991)11月5日～同年11月28日
  - b 調査面積 200m<sup>2</sup>
  - c 検出遺構 堪穴住居跡9棟、土壙2基
  - d 出土遺物 石鎌、石錐、石鋸、石匙等の完成土器62点、礫器36点、剝片642点、土器片690点、計1,430点。
  - e 参考文献 米沢市埋蔵文化財調査報告書第35集「一ノ坂遺跡発掘調査概報第2集」
- 6) 第6次調査
- a 調査期間 平成4年(1992)10月28日～同年11月20日
  - b 調査面積 270m<sup>2</sup>
  - c 検出遺構 堪穴住居跡4棟(連房型堪穴住居跡の一部)。
  - d 出土遺物 石鎌、石錐、石鋸、石匙等の完成土器39点、剝片309点、土器片237点、計585点。
  - e 参考文献 米沢市埋蔵文化財調査報告書第38集「一ノ坂遺跡発掘調査概報第3集」
- 7) 第7次調査
- a 調査期間 平成5年(1993)4月15日～同年6月19日



第2図 一ノ坂遺跡第8次調査Bトレンチ遺構平面図



第3図 一ノ坂遺跡第8次調査区全体図

- b 調査面積 630m<sup>2</sup>
- c 検出遺構 壺穴住居跡1棟、連房型壺穴住居跡（8棟の壺穴住居跡で構成）、墓壙3棟、土壙1基、旧河川跡1基。
- d 出土遺物 石鏃、石錐、石鋸、石鉈、石匙等の完成石器92点、剝片714点、土器片220点、計1,026点。
- e 参考文献 米沢市埋蔵文化財調査報告書第40集「一ノ坂遺跡発掘調査概報第4集」

第1次調査から第7次調査までの調査面積は2995m<sup>2</sup>、遺物総数は1,413,430点である。大型住居跡、連房型壺穴住居跡の両方とも埋め戻して、現況保存しており、前者については土地を買収して保存区域としている。

## 2. 調査の経過

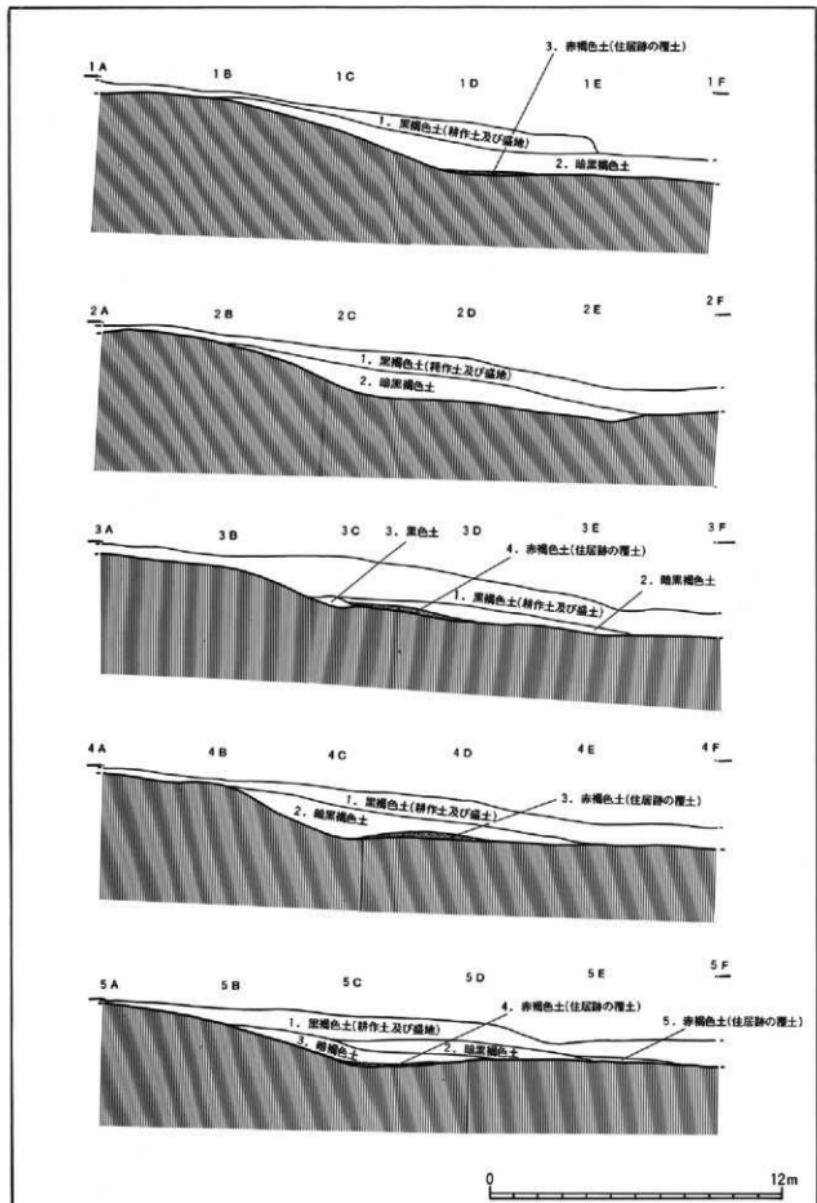
今回の調査区は第1図で示すグリット配図、G 26~58、38~68の範囲にあたり、大型住居跡の南方部に位置す。この地域の大半は果樹園で占められ、試掘坑は困難であることから、ボーリングを主体とする調査であった。したがって試掘坑の可能な畠地にはトレンチA~Eを配することにし、平成6年4月18日から開始した。トレンチ箇所は第3図に示すように、舌状台地の上場地点であり、Bトレンチ以外からは遺構、遺物は確認されなかった。

ボーリング調査は同図で示す箇所、約3000m<sup>2</sup>を対象として実施した。最初にT1~T4を配置し、現況図を作成した後にボーリング調査の結果を現況図に記入する方法で調査を進めた。

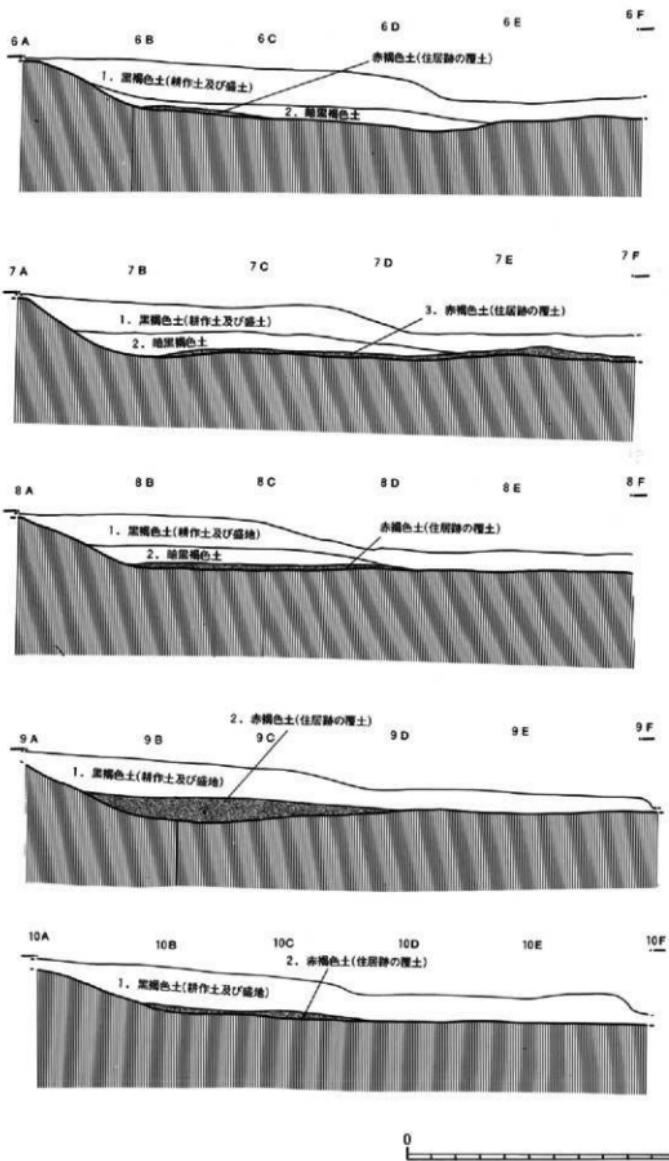
本遺跡は遺構、特に住居跡覆土には赤褐色の土を含む特徴があり、この土色を採集した地点には前述した様に遺構が存在する可能性がきわめて高い。この事項に十分注意して、ボーリングを実施した。

台地の上場は果樹園造成の際に西方から東方へ土砂を移動したとの情報があり、それを示す結果が得られた。台地上場線辺が現況よりも、西方部に認められた。従って、遺構が存在する箇所の表土は盛土が大半を占め、遺構もこれまでの調査結果から得られた様に段丘下部に沿って認められる。

南部の小川が流れる段丘下部は砂利層で遺構はないものと判断される。現地説明会は5月10日に開催した。同日の午後からトレンチ箇所65m<sup>2</sup>の埋め戻しをおこない今回の調査を終了した。



第4図 一ノ坂遺跡第8次調査区土層想定図(1)



第5図 一ノ坂遺跡第8次調査区土層想定図

### 3. 検出遺構

今回の調査範囲は第3図に示した範囲であり、南北62m×東西72mを測る地域を調査対象とした。トレンチ調査が可能な北部の畠地にはA～Eの5箇所にトレンチを配し実施した。

畠地の南側一帯は果樹園で占めらる。トレンチ調査は立木の根をいためるとの判断からボーリングによる土砂採集の方法で調査を実施することにした。幸いにも本遺跡は遺構覆土土色には赤褐色を含む特徴を有すことから、この土色が採集できれば、遺構、特に住居跡の可能性が高いと判断する目安基準となる。

トレンチ調査区とボーリング調査区に分けて説明を加えたい。

#### ○トレンチ調査区【第1区～第3区参照】

いずれのトレンチも耕作土の下は地山となる黄褐色土であり、遺構、遺物を確認したのは第2図に示したBトレンチだけであった。耕作土の深さは20～40cmを測り、東側にいくにしたがって、耕作土が深くなる傾向を示す。

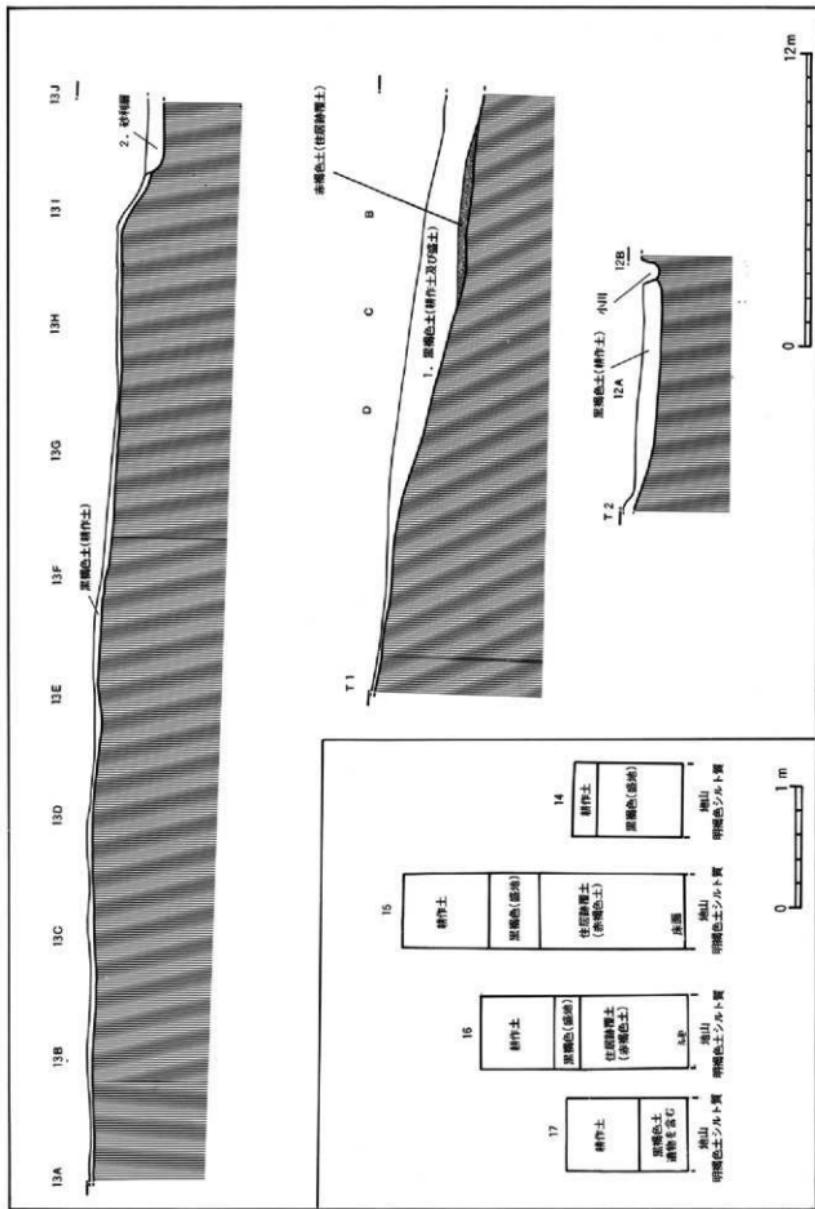
Bトレンチの遺構は不整形状を呈すおちこみであり、プランから判断して自然の「凹」が木の根等の影響で変容された遺構と考えられる。斜面から少量の炭化物、燃土、剝片、土器片が出土している。剝片は第2図の点線で示した小範囲に集中して確認された。剝片、特にチップが大半を占める。出土した遺物の点数土器片34点、剝片44点、凹石1点、磨斧の破片1点であり、土器片に関しては拓影図が可能な6点を図示した。出土遺物から判断して、今回のトレンチ調査区も、一ノ坂遺跡の集落範囲に包括される。

#### ○ボーリング調査区【第1図、第3図～第7図】

本遺跡は段丘下に沿って遺構を構築することから、今回の調査に対してもこの場所に集中してボーリング探査を実施した。最初にT1とT2を南北に設置し、このラインを基準として東西南北に4～5mの間隔で標準となる地点を設定した。「○」の場所が標準地点であり、必要に応じ間隔をせばめる方法で調査を進めた。その結果について、第4図～第6図に示した。1～17の各地点について説明を加える。地点については第3図を参照願いたい。

1の地点は連房型竪穴住居跡が確認された箇所のすぐ南側にある。どこから、次の遺構が始まるのかを重点におき、14～17やA～Eの地点にもボーリング探査をおこなった。さらに一ノ坂遺跡が活動していた時期の段丘上場の把握も重要な要素との認識にたち、その確認にも合せて図示することにつとめた。

第6図 一ノ坂遺跡第8次調査区土層柱状、土層認定図(3)



1 D 地点及び17地点から赤褐色土が認められ、この地点から遺構が（住居跡）存在、始まるものと想定されるに至った。しかも、覆土が50cm以上あるものと理解され、保存状況はきわめて良好と判断される。また、ボーリングを重ねることにより、本来の上場も推測され、現況よりも約10m西に位置することが明らかになった。後世の土砂移動によるものである。

2 の地点からは赤褐色土は認められなかったが、採集した暗黒褐色に少量の炭化物が含まれており、赤褐色土以外の遺構覆土と類似することから、この地点も遺構が存在することと推測される。

3 の地点は盛土が1.5mあり、赤褐色土が3 C から 3 D にかけて確認された。この地点も、遺構が存在することはまちがいないと想定される。

4 の地点は黒褐色土の盛土及び耕作土が1 m 前後を有すものと推測され、段丘の傾斜が発達している箇所と想定される。この箇所からも赤褐色土が採集された。

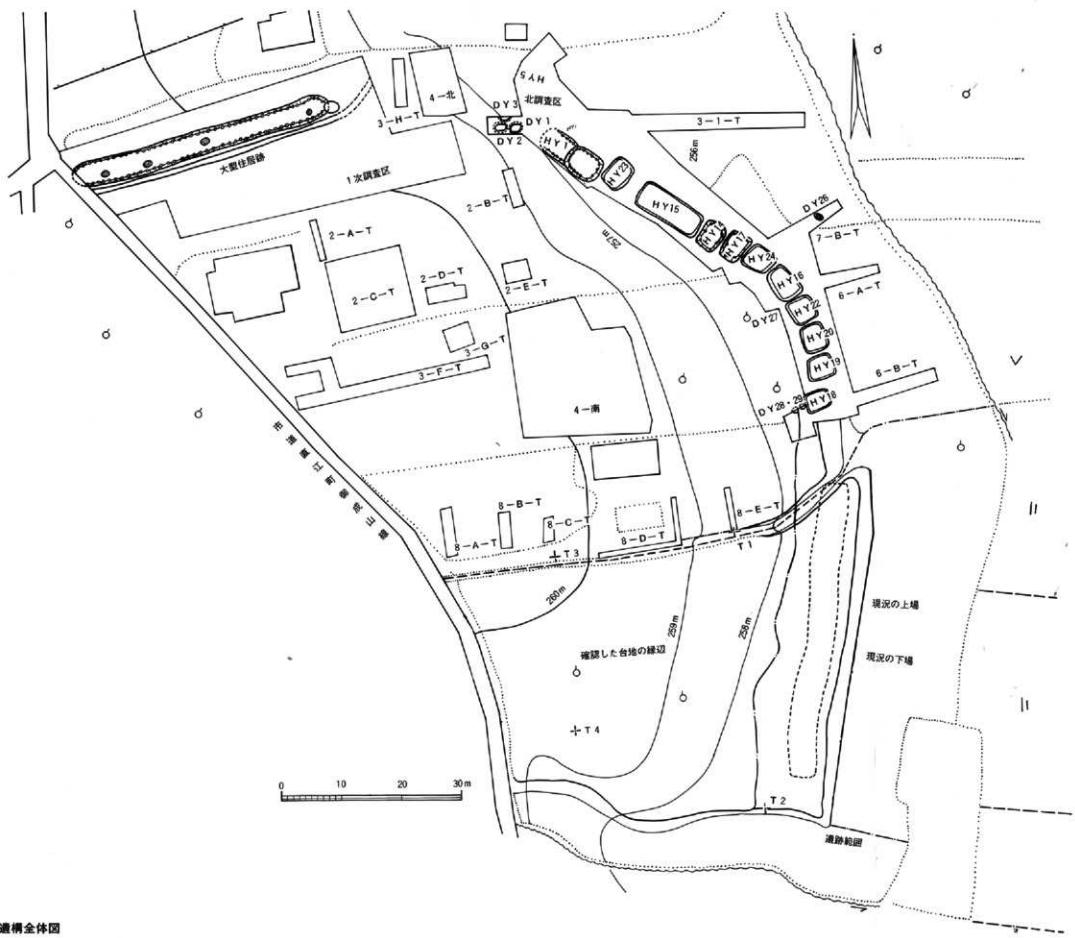
5 の地点からも赤褐色土が採集されている。段丘斜面はゆるやかな状況を呈す箇所と考えたい。また 5 E 地点からも赤褐色土が採集されている。赤褐色土が分布する地点を平面形状に見ると段丘下場に沿て帯状に認められる。5 E 地点は、東にづれることから、遺構（住居跡）とは想定するには問題が残る。

6 の地点からも段丘直下に赤褐色土を確認した。7 の地点は赤褐色土が東方に延びる状況を呈す。8、9、10の地点まで赤褐色が認められた。11、12地点は赤褐土は認められず、10B 布近で遺構は終了するものと想定される。以上が段丘直下及び縁辺に対するボーリング結果であり、これらの事項から、第3図に示した遺構の存在が明きらかになったものと想定したい。

ただし、これらの遺構（住居跡群）が、第1次調査で確認した大型竪穴住居跡になるのか、第6次、7次調査で確認した連房型竪穴住居跡、あるいは両者とはちがう竪穴住居群になるかの三通りの考えが成立する。この点については、今後の課題としておく。

T 3 ~ T 4 のラインは段丘上であり、耕作土も浅く、直下に地山が認められる状況であった。このラインの東側も同様な状況を呈し、他の地区と同様に今回の調査区においても、段丘上には遺構は存在しないものと考えられる。

舌状台の縁辺も、現況とはかなり相異する様相を有しており、多量の土砂が西から東に移動して、果樹園を造成したも結果と言よう。偶然にも遺構群が段丘直下に位置することから、良好な保存状態で今日に至ったものと言えよう。



第7図 一ノ板遺跡遺構全体図

#### 4. 出土遺物

今回の調査区は前述したように、大半が果樹園で占められることから、ボーリング探査が主体であり、遺物はBトレンチからの出土だけであった。遺物の総数は80点であり、土器片34点、剝片44点、凹石1点、磨斧の破片1点となる。

土器、石器、礫器に分け入説明した。

##### ○土器 [第2図]

54点の中で拓影図が可能な土器片は図に示した6点だけであった。出土地点は図に示した。1～3は突刺文、横位、斜位の沈線文を配した土器群で、口縁部片である。2は内湾する器形を有し、焼成は良好で暗褐色を有し、胎土に小粒の石英砂を含む。口屋部に横位の短沈線を配し、斜位、横位、曲線を用いて文様を構成する土器群と考えられる。

1～3の土器片には、蕨状圧痕撚糸文及び横位の撚糸圧痕文は認められない。繩文原体を使用するかわりに、ヘラ状工具や棒状工具を用いて、蕨状撚糸圧痕文や撚糸圧痕文を表現したものと理解され、当市で出土している窪平遺跡a群3類土器に類似する。

1～3の土器群は一ノ坂遺跡においては最も古い時期に位置する。しかしながら、4のループ文と混在して出土しており、窪平遺跡のa群3類土器よりも時期が若干下がるとも考えられる。ちなみに窪平遺跡の土器群の中にループ文は混在していない。すなわち蕨状撚糸圧痕文→蕨状撚糸圧痕文+沈線文→沈線文の編年が可能である。

本市の代表的な前期初頭の遺跡で言えば、万世町八幡原No26遺跡（堂森B遺跡）次に成島町の窪平遺跡そして矢来地区に所存する一ノ坂遺跡となる。

5、6は羽状繩文で、胴部及び底部片と考えられ、胎土が2、3と類似するので同一個体片とも考えられる。

石器は二次調整を加えた剝片4点、チップ32点、剝片8点、磨斧の破片1点が出土している。二次調整を加えた剝片の中には尖端部が欠損した小形の石錐1点、欠損面を有す両面調整の石器3点がある。

磨斧の破片は緑色泥岩を素材に用いて、研磨した磨製石斧の破片であり、刃部の破片と解釈される。破片から推測して、磨斧の刃部を再調整する際に剥離された破片であろう。礫器として片面に凹部、両面に磨面を有す形態で小形の河原石を素材としている。

## 5.まとめ

平成元年度（1989）から開始した本遺跡の発掘調査も今年度で6年目をむかえ、今回の第8次調整をもって大型住居跡周辺の確認調査を、終了する予定である。一連の調査から得られた成果を吟味し、本遺跡の性格、意義、課題に分けて述べまとめとしたい。

### ○性 格

大型竪穴住居跡を中心に約141万点の遺物が出土している。その大半は石器であり、石鎌、石鋸、両尖匕首、石匙の4種類と白玉の完成品や失敗、断念さらに製作途上品が多量に認められた。とくに注目されることは、失敗や断念の未完成石器から製作工程が復元されることである。

また、一ノ坂遺跡で製作された石器は、遺物の追跡調査により、県内外で発見されており、関東地方や中部、東北南部地方に流通していたことが判明している。本遺跡は、石器製作と專業とした石器工房集落であることは明確である。

第8図に示した大型竪穴住居跡は石器製作の工房跡、連房型竪穴住居跡は石器製作をしていた工人の居住跡（宿舎）と理解される。集落が活動していた様相を下部の遺跡配置図から復元したのが上部の復元想定図である。縄文時代において、連房型竪穴住居跡の発見はこれまで類例がない。

### ○意 義

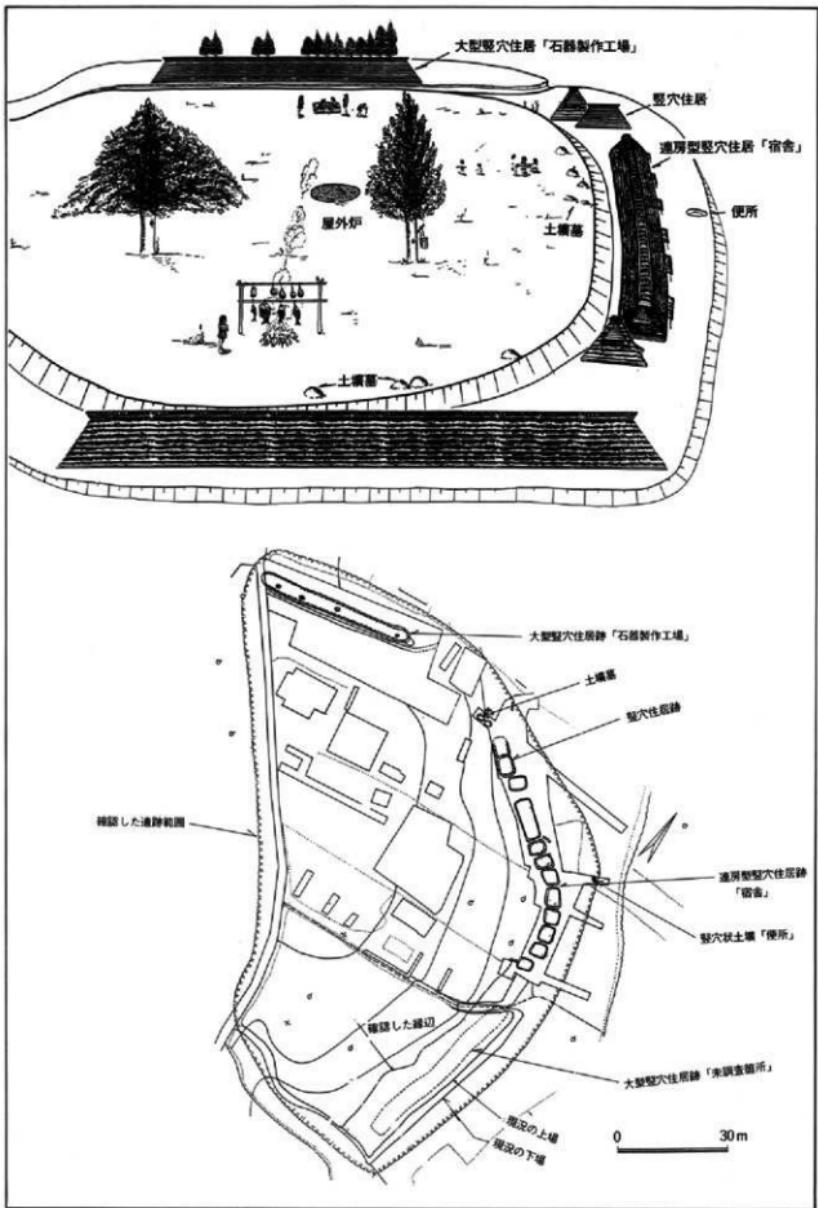
一ノ坂遺跡は、全国でも類例のない石器製作を專業とする石器工房集落といえる。石器工房で製作された石器は、断念、失敗、剥片等を含めた全ての石器を工場内に埋め戻し、ケルミを焼いた炭化物を全面に敷き詰めてカモフラージュしており、技術の流出を極力留める配慮がみられる。

さらに、県内外に石器が流通していることは、製品（完成石器）を運搬する集団の存在や専門集落、狩猟集落といった分業化が既に縄文前期初頭に成立していたと推測され、縄文時代を再検討する発見と言えよう。

### ○課 題

一ノ坂遺跡で製作された石器の流通経路の究明や、石器製作のより詳しい調査が望まれる。平成7年度の調査報告書作成と並行しながら、全国的にも貴重な一ノ坂遺跡の保存や保護、活用も課題となる。

最後になりましたが、一連の調査に際して、御協力いただきました地権者各位に心から御礼申し上げます。



第8図 一ノ坂遺跡復元想定図

## 参考文献

- |      |   |          |
|------|---|----------|
| 1975 | 米沢市八幡原中核工業団地予定地内<br>埋蔵文化財調査報告書第1集 52頁～69頁   | 米沢市教育委員会 |
| 1990 | 遺跡群細分布調査報告書第3集 18頁～25頁<br>米沢市埋蔵文化財調査報告書第27集 | 米沢市教育委員会 |
| 1991 | 一ノ坂遺跡発掘調査概報第1集<br>米沢市埋蔵文化財調査報告書第30集         | 米沢市教育委員会 |
| 1992 | 一ノ坂遺跡発掘調査概報第2集<br>米沢市埋蔵文化財調査報告書第35集         | 米沢市教育委員会 |
| 1993 | 一ノ坂遺跡発掘調査概報第3集<br>米沢市埋蔵文化財調査報告書第38集         | 米沢市教育委員会 |
| 1994 | 一ノ坂遺跡発掘調査概報第4集<br>米沢市埋蔵文化財調査報告書第40集         | 米沢市教育委員会 |
| 1994 | 窪平遺跡、第Ⅰ次・第Ⅱ次発掘調査報告書<br>米沢市埋蔵文化財調査報告         | 米沢市教育委員会 |

## 一ノ坂遺跡調査一覧表

調査年度	事業内容	調査年月日	調査面積	調査所見	備考
平成元年 第一次調査	・宅地造成に間わる 調査(保存箇所)	5/12~ 6/30	800m <sup>2</sup>	旧河川段丘下部から大型住居跡 を確認した。	遺物は石器類を中心に約 137万点以上出土してい る。
平成元年 第二次調査	・河川段丘上を宅地 造成に関する調査	2/22~ 3/3	200m <sup>2</sup>	河川段丘上は遺構は確認されな かった。	石匙1点、土器片2点、 剝片20点
平成2年 第三次調査	・遺跡範囲確認調査 (中央部から東側)	4/9~ 4/10 5/31~ 6/14	200m <sup>2</sup>	段丘の斜面より土壌墓3基が 出土されている。 土壌墓内から白玉と石匙、石鉄 が副葬品として認められた。	平成元年度確認の大型堅 穴住居跡は砂漠で埋め戻 して現状保存。 土器、石器合わせて 14,474点
平成2年 第四次調査	・遺構分布確認調査	11/1~ 12/21	674m <sup>2</sup>	旧河川段丘の下部より堅穴住居跡 5棟が3時期に亘って検出され た。	石匙14点、他石器11,967 点、土器片1,849点
平成3年 第五次調査	・遺跡範囲確認調査 (東側から南側) ・住居跡分布確認調 査	11/5~ 11/28	200m <sup>2</sup>	前年度の南側を中心として住居 跡の広がりを確認したところ、 新たに8棟の住居跡が認められ た。 住居跡は概ね4基の切り合いで 有しており、土層の觀察から時 間的な相違は認められなかつた。	遺物として石鉄14点、石 錐2点、石匙23点、土器 破片総数1,972点
平成4年 第六次調査	・遺跡範囲確認調査 (西側から北側) ・下層遺構確認調 査	10/28~ 11/20	270m <sup>2</sup>	これまでの住居跡の下層にも別 の住居跡が存在することが解り 掘り下げを実施したところ、住 居跡が極端に隣接した5棟認め られた。仮称「連房型堅穴住居 跡」とする。	遺物としては石鉄2点、 石錐2点、石匙5点、土 器破片数1,849点
平成5年 第七次調査	・連房型堅穴住居跡 の範囲確認 ・包含層の確認	4/15~ 6/19	630m <sup>2</sup>	連房型堅穴住居跡の範囲を明確 にするために、前年度の調査区 を拡張して調査した結果、10棟 の堅穴住居跡を連ねた全長約 50mの住居跡と判明した。他に 土壌4基とピット1基が確認さ れている。	住居跡1棟を掘り下げた 遺物としては、石鉄2点、 石匙10点、土器片700点。
平成6年 第八次調査	・補足調査(南西側) 範囲確認調査	4/18~ 5/10	120m <sup>2</sup>	果樹園であるため遺構の状況が 不明であった南側をボーリング 調査で確認、大型住居の存在が 判明した。	最終報告書に向けた膨大 な遺物の整理を行 う。

報告書抄録

ふりがな	いちらのさか
書名	一ノ坂
副書名	一ノ坂遺跡発掘調査概報
卷次	第5集
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第48集
編著者名	菊地政信
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992 山形県米沢市金池三丁目1-55 TEL 0238-22-5111
発行年月日	西暦 1995年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一ノ坂	山形県米沢市 矢来一丁目 1073-4号	6202	1207(米 沢市遺跡 番号e- 147)	37度 49分 13秒	140度 4分 9秒	19940418~ 19940510	65	一ノ坂遺跡 「大型竪穴住 居跡」周辺の 開発予定地確 認調査

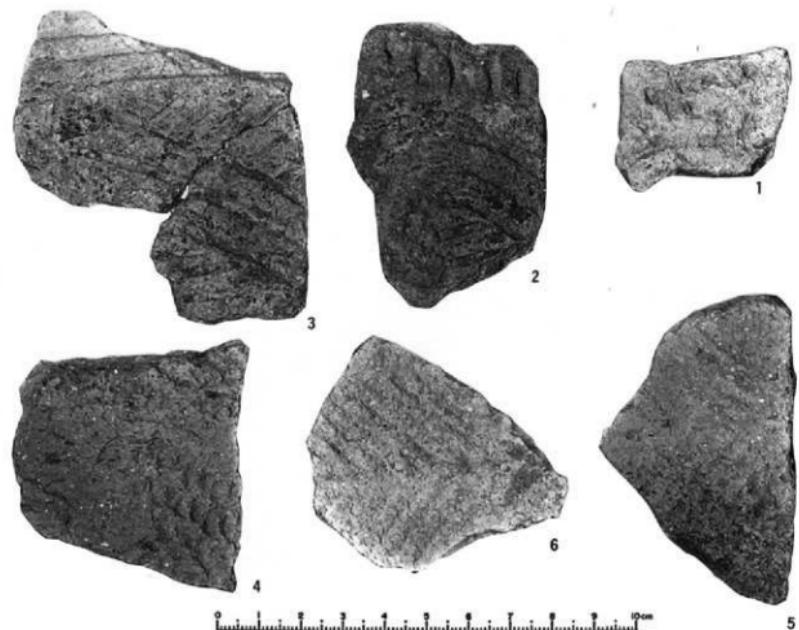
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一ノ坂	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	縄文土器 石器	縄文時代前期初頭の 石器工房跡である。 石器工房跡は全長 43.4mで日本最長の 規模を有す。宿舎跡 と推測される連房型 竪穴住居跡は日本で 始めて発見され、8 棟で構成される。遺 物も石器を中心に約 149万点出土してい る。

---

---

写 真 図 版

---



▲第8次調査Bトレンチ出土土器（上段） ▲調査風景（南方から）（下段）



▲B トレンチ遺構完掘状況（南方から）



▲B トレンチ土層状況（東方から）

米沢市埋蔵文化財報告書第48集

一ノ坂

一ノ坂遺跡発掘調査概報

第5集

平成7年3月24日 発刷

平成7年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会

米沢市金池三丁目1-55

TEL (0238)22-5111 内線7504

印刷 榎よねざわ印刷

米沢市城西二丁目3-72

TEL (0238)21-1212